慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『乗合船』について
Sub Title	On the magazine Noriaibune
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.16 (231)- 36 (211)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『乗合船』について

田坂　憲二

はじめに

昭和二十年と二十一年に、二冊だけ発行して途絶した『乗合船』という同人誌が存在する。「同人と会員に之を別ち」（編輯清記）と記されており、非売品であった第壹輯に対して第弐輯では「八圓」の定価が記載されているから、純然たる同人誌とは言い難いが、寄稿された文章の美しさと洗練された造本で注目されるものである。同人は記載順に新村出、小杉放庵、川田順、高田保馬、吉井勇、中川一政、中山正善、湯川秀樹の錚々たる顔ぶれである。発刊の辞にあたる小引を書いているのは同人中最年長の新村出であるが、同人全体との交友の密度やバランスから考えて、中核となったのは吉井勇であろう。編集者・発行者が、吉井が命名者である甲鳥書林の創設者の二人、矢倉年と中市弘であることもそのことを強く推測させる。小杉放庵や新村出から吉井勇に宛てた書簡からもそのことは裏付けられる。

この『乗合船』は、その名前のごとく一艘の船に乗り合わせた人々の紐帯こそが何よりの魅力である。関わった人々がこの雑誌を大切に保存し、今日に伝わっていることからもそのことは推測される。この雑誌の同人たち、寄稿・投稿した人々

について考察してみるとともに、書名や発行の経緯、先学の提起した重要な問題について考えてみたい。

一　研究史概要

この『乗合船』に言及した文献は稀少であるが、いちはやくこの小冊子に着目したのは、やはりといって良いであろうが、近代文献研究の第一人者紅野敏郎であった。

紅野は、雑誌『国文学　解釈と教材の研究』誌に連載していた「逍遥・文学誌」の第一二六回（平成十三年十二月）でこの雑誌を取り上げ、第壹輯、第弐輯の全目次を掲出し、放庵・一政・新村・吉井らの短歌を適宜紹介しながら、この雑誌の色調を極めて的確に素描する。特に、昭和二十年創刊の雑誌として、造本の美しさと、時流に超越した言説の多さに着目している。「逍遥・文学誌」は連載記事のために僅か四ページしか与えられないが、その窮屈な紙面に、形態と内容の両面からこの雑誌の特色を見事に抽出して見せた紅野の手腕は巧みとしか言いようがないほどである。実見があまり容易でないこの雑誌であるが[1]、紅野の文章を読めばまさにその本自体を手に取って繙いたかのような錯覚を覚えるほどである。

それでは、紅野はいつ『乗合船』という雑誌を入手したのであろうか。「逍遥・文学誌」第一二六回の書かれた平成十三年以前であることは明白であるが、もう一つの手がかりは、同文中の記述そのものに見られる。紅野は、窮屈な紙面の六分の一ほどの分量を割いて、第壹輯所載の武者小路実篤の「利玄の歌へる曼珠沙華」の記事を取り上げ、利玄の短歌の「技巧まで見抜いた発言」を高く評価している。その上で、小学館版『武者小路実篤全集』が作品年表に載せながらもこの文章そのものは収録しなかったことに言及し「若き日以来の友人利玄へのゆきとどいた短歌理解ゆえ、この上なく悔やまれる」と述べている。紅野自身が「全集全体の推進に大きくかかわった」ゆえの自省を籠めての発言であろう。注目されるのは「この時点では「乗合船」は見ていなかった」と述べていることで、『武者小路実篤全集』の刊行は、昭和六十二年一月から平成三年四月であるから、紅野がこの資料を入手したのは、平成三年から平成十三年の十年間のことである。

このことに拘泥したのは、紅野の蒐集した貴重な雑誌類は日本近代文学館に寄贈されて整理中であり、『乗合船』の入手

経路を具体的に知ることが出来るからである。紅野敏郎は、近代の文学雑誌といえば必ず名前のあがる扶桑書房から、二冊・二万四千円で『乗合船』を購入している。これは実に適切な価格設定ではないだろうか。平成十年前後のこととすれば、この資料の価格は安すぎず、もちろん高すぎず、文献の稀覯性と貴重性を熟知した上で、必要とする人間に渡すことのできる設定であろう。この業者にして、この研究者あり、この雑誌を入手した紅野の小躍りする姿が目に浮かぶようである。

次いでこの雑誌に言及したのが、近時吉井勇研究で次々と大きな成果を上げている細川光洋である。細川は『湯川秀樹未発表書簡吉井勇宛六通（翻刻）　附吉井勇宛未発表短歌を含む九首』（静岡県立大学国際関係学部『国際関係・比較文化研究』一四、平成二十七年九月）の中で、京都府立京都学・歴彩館所蔵の吉井勇宛湯川秀樹書簡から、従来知られていなかった湯川の短歌を発掘し、『乗合船』所収の短歌なども視野に入れながら、当時の湯川の心情を浮き彫りにして見せた。多くの資料に息を吹き込んで蘇らせた紅野敏郎に教えを受けた細川らしい、資料紹介の域を遙かに超えたすぐれた論考である。

二　『乗合船』概観　―附、書名のことなど―

『乗合船』はB五判の大本。第壹輯が、昭和二十年五月十五日印刷、五月二十日発行、編集発行人が京都市左京区下鴨泉川町六番地矢倉年、発行所が京都市中京区三条高倉東入養徳社内乗合船刊行所である。第弐輯が、昭和二十一年五月十日印刷、五月二十日発行、編集人が京都市左京区下鴨泉川町六番地矢倉年、発行人が中市弘、発行所が京都市左京区下鴨泉川町六甲文社（乗合船刊行所）である。「輯」という表記は表紙によるもの、奥付では「号」表記である。奥付に見える二人の人物、矢倉年と中市弘は、昭和十年代に京都を根城に内容・造本共に時代を超えた優れた出版物を刊行した甲鳥書林の創設者である。[2] 甲鳥書林は戦時下、昭和十九年に天理時報社に吸収され養徳社となっていたが、中市弘は甲鳥書林社長から養徳社社長に横滑りしていたから、第壹輯の編集発行人を矢倉年とするものの、実質的には第弐輯同様に、編集矢倉年、発行中市弘であっただろう。第壹輯のちょうど一年後に第弐輯を刊行した。

物理学者の湯川秀樹に、そのものずばり「乗合船」という文章がある。『新村出全集』第八巻（昭和四十七年一月）の月報のために執筆されたもので（『自己発見』毎日新聞社、昭和四十七年十月に再録）、湯川と新村の関係、吉井との関係、甲鳥書林（ある出版社と書かれている）との関係を短い文章の中に的確に記述したものである。そのなかに次のように記している。

そうこうするうちに、どういう切っかけからであったか、和歌の同人誌を出す話が進行し、思いがけなく私も同人の一人に加わることとなった。新村・吉井両大人のほかに、小杉放庵、川田順、高田保馬、中川一政、中山正善という顔ぶれであった。みな私より年長者であり、川田さんのような専門の歌人は申すに及ばず、長い歌歴をもつ人たちばかりであった。

湯川が『新村出全集』の月報に文章を請われたのは、新村との深い交友によるものであることは言うまでもない。ただそのテーマに『乗合船』を選んだのは、新村がこの雑誌の刊行の序に当たる「小引」を書いていて、それが「乗合船『小引』」という標題でこの全集の十二巻に収録されたことにもよるだろう。湯川は「創刊号の巻頭の重山先生の「小引」は「乗合船は、俗に似て雅……」に始まる、なかなかの名文」であると述べている。

ところが「乗合船」というこの雑誌の名称は、違うものとなる可能性もあったのである。

昭和十九年三月二十二日の日付が記載されている（消印も同日）吉井勇宛の新村出の葉書（京都府立京都学・歴彩館所蔵、文書番号三九四、以下同館所蔵の資料については文書番号を明記する）によれば、吉井から新しい雑誌の名前を付けてくれと言われた新村は、最初に「静好」という名前を提案している。「静好」とは、「詩経国風・鄭風」の「女曰雞鳴」に拠るもので、いかにも新村出らしい命名である。[3]

ところがこの名称は新村自身によって、早々に別案と差し替えられている。

先の葉書の約一週間後、三月三十日の日付（消印は三十一日）のある葉書（文書番号五二九）には、「歌のざつしの名（中略）静好としては如何と存じ居り候処、過日ふと『乗合船』（稿者注、二重丸の傍点あり）としては一層おもしろからん

とおもひつき候が御替不可、如何にや」と記されている。すなわち、最終的にこの同人誌の書名となった「乗合船」は、実は第二案であったのである。ともに新村出によって考えられたものであるが、初案の「静好」と「乗合船」とでは、随分異なった印象になる。

この時、三月末の時点では、新村は新案を強く推すべく直接吉井に話をしたかったらしい。ところが「御転宅前に参上御話を期し奉り候へども、寒さ暖さ定めなきほどにひたすら冬ごもり」という状況で、それが叶わないと続けている。

この文言から、吉井の「転宅」の話が持ち上がっていたことが分かる。吉井勇は、昭和十三年秋、四国高知から、京都北白川に移ってきた。言わば漂泊の四国時代を切り上げて、京都にしっかりと根を下ろして、次々と優れた著述を公刊してきた。北白川には川田順や臼井喜之介もおり、吉井にとっては好もしい土地柄であったはずである。ところが十九年十月には岡崎円勝寺町に転居し、さらに半年後、京都を去り越中八尾へと旅立つこととなる。吉井が北白川を去ったのは自ら好んでではなかろうが、ここを去らねばならぬ理由はこの年の春には顕在化していたことが分かる。新村の文言では、吉井の転居は喫緊のことのように思われるが、実際にはこののち半年の間、吉井の北白川時代が続くことになる。恐らくは、吉井の意に反した形で北白川を去らねばならぬ事情が発生したが、良い転居先が見つからないので、実際の引っ越しが遅れたという内実ではなかっただろうか。

いささか脇道にそれてしまったので、書名の問題に戻りたい。

第二案として提案された「乗合船」であるが、こちらにすんなりと変更されたわけではなかったらしい。新村の葉書に対して、吉井勇からあまり芳しくない反応が、書簡か何かで届いたのではなかろうか。この時の吉井からの返信は確認出来ないが、吉井の反応に対する、新村の再返信からそのことが窺われる。四月二日消印の新村出の葉書（文書番号五三〇）がそれである。そこには「乗合船の名、いかにも御来示の如に（「に」重複）候へば、やはり静好の方を提案、推薦如何」などと記されている。同葉書には、有名な西行が天龍川で乗船を拒絶された話[4]などに「乗合船」の用例がないか捜してみたとも記されている。猶、この逸話は新村の「小引」でも言及されている。

新村側の資料しか確認出来ないので、四月二日の新村の反応が過敏なものである可能性もあろう。吉井はさほど「静好」という書名を押さなかったのか、あるいは「乗合船」を押す別の声があったか、新村の意識では二転、三転したが、最終的には今日知られている「乗合船」という書名に落ち着いたのである。「乗合船」という形で書名が決着したのは意外に早かったのではなかろうか。

新村が「やはり静好の方を」提案してから約十日後、東京田端の小杉放庵から吉井勇宛に届いた葉書からそのことが推測される。十九年四月十一日の消印のあるそれには、放庵は「歌の雑誌はおもしろい催しと存ます、のり合ひ船といふ名が何やら文化文政じみて、ずゐぶん窮したものだと存ます」（文書番号五一一）と記している。この文面から、既に「乗合船」に書名が決したとは断定出来ないが、別の同人とこうしたやりとりがある以上、おのずから「乗合船」という名前に帰着したに相違なかろう。

三　第壹輯の乗船者たち　―甲鳥書林人脈―

それでは第壹輯から検討していこう。まず、目次を掲出する。

同人詠草　法隆寺十七首　新村出
戦ひを思ふ　小杉放庵
希摩拉耶の春　川田順
戦争　高田保馬
玄冬居愚草　吉井勇
野沢七首　中川一政
出詠七首　中山正善
心泉集　湯川秀樹

寄稿雑載　利玄の歌へる曼珠沙華　武者小路実篤
句稿　大町文衛
紙漉の歌　上村六郎
風塵詠草　風塵居短歌抄　安藤彦三郎
草川集　中市弘
五月　田島とう子
旅信　矢倉年
小引・伊豆流翁　題箋・藤井紫影　口絵・小林古径　カット・小杉放庵

目次には記されていないが、一頁目（扉）に「表紙拓本解説」と、四十二頁に「編輯清記」がある。目次は二〜三頁、四十三頁に同人名、四十四頁が奥付である。

まず、「同人詠草」から補注の必要なものを簡単に述べる。

新村の「法隆寺十七首」は標題にかくあるが、この十七首に「大神楽」八首があり、総計二十五首。放庵の「戦ひを思ふ」は、「戦ひを思ふ」十首「予科練習生」六首「眠られず」六首「稲刈るまで」十七首、総計三十九首。川田の「希摩拉耶の春」は「林蘭居画伯の印度旅行談を聴く」云々の詞書があり、金剛峯寺の依頼によるインド・ヒマラヤへの石崎光瑤の旅の談話に触発されたもの。高田保馬の「戦争」は、「退官」二首「戦争」七首「春寒」二首「耐乏」三首「旅中所見」六首、総計二十首。吉井の「玄冬居愚草」は、「嚔の歌」六首「破れ韈の歌」六首「蘩蔞の歌」六首、総計十八首。「玄冬居」は昭和十九年秋から二十年初めにかけての岡崎円勝寺の住居のこと。一政の「野沢七首」は雪景色やスキーを詠む。中山正善の「出詠七首」には「千百とせ五十のむかしを偲びつゝ文庫御祖の石碑はたてるも」と天理図書館前の石上朝臣宅嗣卿顕彰碑を詠むものが含まれる。この碑文の文章は新村出作である。湯川の「心泉集」は、「その一」五首「その二」四首「阿寒行」三首「当麻寺」三首「生母の死に遭ひて」五首、総計二十首。

これら同人たち、いわば『乗合船』の乗船者たちの名前を一見して、この頃吉井勇が親しく交わった人物ばかりであることが分かる。そのことと当然重なり合うわけであるが、すべてが甲鳥書林と深い関わりのある人物でもある。甲鳥書林の社名の命名者である吉井勇を筆頭に、川田・新村は甲鳥から多数の書物を刊行しており、吉井に次いで甲鳥のブレーンとも言うべき存在。経済学者高田保馬は一方では歌人でもあり、甲鳥書林から『民族耐乏』『（歌集）洛北集』を刊行して幅広い側面を見せる。小杉放庵は、甲鳥書林最初の刊行物である吉井の『天彦』に挿画を提供、中川一政も尾崎士郎の『九十九谷』の装丁挿画を担当している。書林の広報誌『甲鳥』の第一号は「歌集天彦特輯」、第二号は「井原西鶴　九十九谷　推薦集」であり、これらの書物が甲鳥書林にとって重要であったことを示している。このほかにも放庵と一政は甲鳥書林本の装丁や挿画を数多く担当している。湯川秀樹の『理論物理学入門』（甲鳥学書シリーズの第十九冊）は予告のみで未刊だが、戦後の甲鳥書林から『湯川秀樹選集』を刊行する。そして、中山正善は甲鳥書林を吸収合併した養徳社側、天理の真柱であることは言うまでもない。こうして見ると、『乗合船』は甲鳥書林人脈によって船出した書物であるとも言えよう。発行者中市弘、編集者矢倉年と甲鳥書林の二人が関わっていることから推測されることではあるが、同人のすべてが甲鳥書林人脈で形成されていたのである。

寄稿雑載の三人は、同人に準じる存在であったようだ。「編輯清記」に「本号には、武者小路、大町、上村諸家の稿を得更に紫影博士の題簽に古径放庵両画伯の装画あり以て創刊の誌を飾り得たり。記して深謝す」と記されており、三人については依頼原稿であっただろう。実篤は『西鶴』を、吉井の『天彦』と同時に、甲鳥書林最初の出版物として刊行している。「利玄の歌へる曼珠沙華」については紅野が詳述すること第一節で述べた。大町桂月の息、文衛は昆虫学者として著名で、甲鳥書林から『虫・人・自然』（昭和十六年）『よしきり物語』（翻訳、昭和十七年）を刊行している。上村六郎の『日本色名大鑑』は甲鳥書林のロングセラーであって、同書の発行所名が甲鳥書林・養徳社・甲文社と変遷することは、そのまま甲鳥書林の歴史を凝縮している。この三人もまた甲鳥書林人脈に連なるものであった。寄稿雑載の三人が同人に準ずるのは、同人とこの三人だけは各原稿の冒頭に小杉放庵のカットが載せられていることからも窺える。これが次の「風塵詠草」だ

と、この項目の冒頭にカットがあるだけで、個人個人には描かれない。カットと述べたものは、上記「古径放庵両画伯の装画あり」の「放庵」の「装画」にあたるもの。猶「古径」の「装画」については第五節で検討する。

「風塵詠草」の四人は、実質的発行者の中市弘と編集者の矢倉年と、安藤彦三郎、田島とう子。中市弘と矢倉年も短歌をたしなんでいて、「この義兄弟（稿者注、中市弘は矢倉年の義弟）は共に前川佐美雄の『日本歌人』に依る歌人」[5]であった。中市弘自身も、晩年に刊行した歌集『山望』でそのことを述べている[6]。矢倉年の方は文章を綴ることに早くから自覚的で、『新民謡集　青い手帖』（林吉之助刊、昭和十年）、や『国民絵本山ノコドモ』（博文館、昭和十六年、「ガクカウミチ」以下矢倉の十七編の詩に六人の画家が絵を添えたもの）などを出している。中市も矢倉も吉井に様々な教えを受けたであろうが、こと短歌については「一度も先生に見てもらったことがない」（歌集『山望』「あとがき」）という中市と、吉井に添削をしてもらっていた矢倉とは対照的である[7]。

他の二人のうち、田島とう子もまた『日本歌人』の同人の一人で、歌集に『道』（蒼生短歌会出版部、昭和十七年）『香』（波多野書店、昭和四十一年）がある。『香』の「あとがき」によると『道』以降の和歌で「二冊分の歌稿が得られた」ので「近い方」を先にして「第三歌集」とした、とある。『道』と『香』の間に入るはずの第二歌集には『乗合船』の時代の和歌が含まれた可能性があるが、未見である。

安藤彦三郎は、尾上柴舟に師事した『水甕』の歌人。文藝春秋社社員時代、昭和十八年三月の日本文学報国会短歌部会で、前年に満州国皇帝を「現人神」と記した久米正雄を糾問したことで知られる[8]。こうした人物を含んでいるのが、第壹輯が刊行された昭和二十年という時代を示しているであろう。歌集に『風浪居短歌抄』一～三、『風狂山房短歌抄』の升型本四冊があるが、いずれも戦後「昭和三十三年の秋に「水甕」に復社してから」（『風浪居短歌抄』一の「あとがき」）の短歌を集めたもの。最後の歌集『風狂山房短歌抄』には十四頁もの長文の「あとがき」があり、自身の歩みを回顧しているが、文学報国会の事件や、『乗合船』に寄稿した経緯については触れられていない。

猶、「同人詠草」に関しては、この第壹輯が刊行された直後に小杉放庵から吉井勇に送られた葉書（五月二十日付、消印

も同日、文書番号四一四）で、感想が述べられている。放庵が、越中八尾の常松寺で病床にあった吉井を訪ねた直後に書かれたもので、悲惨な生活を強いられた常松寺から無事に引っ越したのではないかと書き始められ、『乗合船』に言及し、吉井の歌は「天質も」あるが「積年のたんれん腰の入れ方が」違うと、書名に引っかけた洒落た言い方をして、続けて「他の七人は結局素人のうまいのと思ふ外」ないと記している。病後の吉井には何よりの慰めであったと思われる。(9)

四　第弐輯の乗船者たち　―伊賀人脈など―

『乗合船』は吉井勇にとってはやはり大切な雑誌であったようだ。第壹輯は疎開先の越中八尾で手にしたが、帰京後の二十一年一月十七日（消印は十八日）には、早くも第弐輯の刊行の予定を三重県一志郡多気村の矢倉に尋ねる速達を送っている。その文面は、「『乗合船』の御出版の御予定も承りたしと存じ居り候。原稿送りおき候へども、御受取り下されしや否や。今度御上洛の節にはお目にかかりたしと存じ居り候」などと記されている。この「原稿」が『乗合船』のものであるかどうかは検討の余地があろうが、帰京後、新しい歌集の出版や、既刊歌集の復刊を次々と求められ、多忙の中にあった吉井が、この雑誌を気にかけていることは注意してよいだろう。結局、吉井の手紙より約四か月遅れ、第壹輯からちょうど一年後の五月二十日に、第弐輯が、中市弘が養徳社を退社して設立した甲文社から刊行されることとなる。

以下、第弐輯について検討する。まず前節に倣って目次を掲出する。

同人詠草　老懐　新村出
山居二十首　小杉放庵
山茶花　川田順
岩戸村　高田保馬
竹林彷徨　吉井勇
古京の秋　湯川秀樹

寄稿雑載　小山居愛語　新村出
両京往来　佐々木笹舟
啄木と私　野村あらえびす
朝ごゝろ　佐佐木信綱
愛陶の民族　寿岳文章
風塵詠草　山ふかく　岡田清
伊賀　中市弘
竈の歌　石黒梢
朝・朝　喜田聿衛
秘歌　川端亮一
疎開地浅春抄　羽仁新五
早春賦　久保文雄
南禅寺薄暮　矢倉年

小引・伊豆流　題箋・藤井紫影　口絵・小杉放庵　カット・小杉放庵

前号同様に、一頁目（扉）に「表紙拓本解説」、目次は二～三頁、五十五頁に「編輯清記」、五十六頁に同人名、五十七頁が奥付である。

刊行を気にかけていた吉井勇の「竹林彷徨」は、「達磨忌もすでに過ぎたる竹日和」と詠み起こされており、二十年十月に京都府綴喜郡八幡町に転居して間もなくの作である。「竹林彷徨」は『短歌風土記　山城の巻Ⅰ』（創元社、百花文庫19、昭和二十二年六月）の同題の下に一首を除いてほぼそのままの形で再録されている。

その一方で「編輯清記」に「中川一政、中山正善両同人の作品遂に本誌出刊時に到着せず、之を割愛するの止むなきに至

る」と記しており、「同人詠草」は六人に留まる。同じく「本号には、佐々木惣一、佐々木信綱、野村あらえびす、寿岳文章、同人放庵画伯の口絵とともに二号誌又錦花を添ふる幸を持ちぬ」とあり、寄稿雑載は準同人格であることがやはり窺われる。新たに名前の出た四人の中では、憲法学者佐々木惣一（笹舟）が、高田保馬と甲鳥書林との関係に似ていて、甲鳥書林の後身甲文社から『憲法改正断想』（昭和二十二年）を出しているほか、『時を刻むの記』（甲鳥書林、昭和十六年）、『疎林』（昭和二十二年、甲文社、「両京往来」の句の大部分が再録されている）などを刊行している。野村あらえびす（胡堂）も、近刊予告された甲鳥課外よみもの『たのしい音楽』は未刊に終わったようであるが、早世した愛娘松田瓊子の遺著『紫苑の園』『小さき碧』『サフランの歌』はいずれも甲鳥書林から刊行されている。[10] 労作『野村胡堂・あらえびす来簡集』（同記念館編、平成十六年）には、吉井勇からの来簡も当然含まれているが、野村胡堂と矢倉年との書簡をめぐっては近藤健史の詳細な検討がある。[11]

第弐輯の「風塵詠草」には、新たな寄稿者が多く見られる。本節では、この部分について詳しく検討してみる。

この欄は、第壹輯では四人だったが、弐輯では八人と倍増している。中市弘と矢倉年は両号ともに詠草を提出しているが、注目すべきはその位置、順番である。この欄の人数が倍増しても、ともに二番目に中市弘の名前が、最後に矢倉年の名前が位置しているのである。偶然の可能性もあろうが、ここには何らかの意識を読み取るべきではないだろうか。中市は、『乗合船』発行人としての自負として、脇句の位置に座り、一座の亭主の立場にあることを表明しているのではないか。ならば挙句の位置に来る矢倉年は、執筆（しゅひつ）として記録係に徹するということであろうか。推測ではあるが、このように考えれば、中市と矢倉の性格とも通じるようで面白い。

さて、第壹輯の「風塵詠草」が安藤彦三郎と田島とう子という『水甕』や『日本歌人』でそれなりの位置を占めた歌人であったが、第弐輯の人物の共通項についてはいささか分かりづらい。いくつかの要素が複合しているが、その中で注目すべきは、矢倉や中市の故郷である伊賀の地縁である。中市が「伊賀」という題のもと八首を詠んでいるのはその象徴のようである。伊賀人脈を考えるとき、最も分かりやすいものが川端亮一であるので、彼から見ていこう。

中市弘が晩年に『山望』という歌集を刊行していることは前述したが、その書名の由来を次のように言う。

題名の「山望」は、終戦後、郷里、上野市に蟄居しているとき、今回、題字、装幀をお願いした濱辺万吉画伯や、稲濱医師、上野市長奥瀬氏、作家岸宏子氏と一緒に暫く発行していた月刊同人誌の題名を拝借したものである。

雑誌『山望』は、創刊号が昭和二十二年七月刊A五判三十六頁、第二号が二十三年一月刊四十四頁で、三号は未見だが第二号「編集室から」で横光利一追悼号の計画が知られる。創刊号は編輯兼発行人が岸宏子、二号は編輯人が岸宏子で発行人中市弘発行所甲文社である。中市も矢倉年も寄稿しており、二号とも裏表紙は甲文社の広告である。創刊号巻頭に大山定一の「地方文学の問題」を得たのも甲鳥書林人脈であろう。中市の文章にあるように、甲鳥書林と関わりの深い濱辺万吉も同人の一人で、二冊とも装幀とカットを担当しているほか、創刊号には「紙思案」という一文を寄せている。同人には芭蕉研究者で歌人でもある伊賀焼の菊山當年男の名前も見える。[12]『山望』という雑誌を実際に領導していたのは岸宏子であろうが、そこには伊賀人脈総結集という感がある。そしてその中に川端亮一も名を連ねていて、創刊号に「山の家」「聖林寺」、第二号に「中宮寺」という詩を寄せている。二号の「同人雑記」には「若きマルキストへ—文学の純粋のために—」を寄せ『山望』誌が保守的・反動的と言われることに抗議している。

この川端亮一は戦前、私家版の『秘歌』という歌集を出している。全十五首を自筆で記した和装本である。後記と奥付は印刷で、「川端亮一歌集　秘歌は昭和十七年霜月二十日著者自筆自家版家蔵本として限定参拾部を上梓す　之はその内第□冊也　非売品」とある。『乗合船』掲載歌十首もまた「秘歌」と題されているが、この歌集と重複するものに「おしろひも紅もうすきが好きなりと君が情もうすかりしかな」の一首がある。川端は翌々年『秋風の歌』という民謡集を出しており、後記に「川端亮一民謡集　秋風の歌は昭和拾九年睦月拾日自家版非売本として限定参拾部を上梓す　之はその内第□号也」とある。『秘歌』は十七番本、『秋風の歌』は七番本を披見した。戦後は、児童向けの読み物や漫画を多く刊行していた奈良県生駒のあやめ書房から『怒濤の騎士』を、湯川弘文社から独立した岡角次の鷺書房[13]から『三日月城の怪』（昭和二十三年十二月刊、伊賀上野城の場面から始まる。）などを刊行している。『乗合船』に投稿したのは、伊賀人脈・中市矢倉人脈によ

るものであろう。

伊賀人脈と言うことを視野に入れれば、もっと分かりやすい人物がいる。久保文雄（本名文武）がそうである。久保は後年観阿弥の生地が伊賀上野である史料などを発掘し、学会に問題提起をしたことで知られる。[14] 晩年は、伊賀の地方史研究の第一人者であった。國學院在学中から『アララギ』の歌人であったが『乗合船』との縁は伊賀の地縁であろう。久保の没後、二三子夫人の手でまとめられた歌集『春の霜』（平成十七年）があるが、若い頃病弱であったが故に一層家族への慈しみに溢れる歌で満たされている。『春の霜』には前記岸宏子、沖森書店沖森直三郎などの名前も見え、伊賀の文化を考える上で重要である。

第弐輯の「風塵詠草」執筆者のうち羽仁新五については、紅野敏郎が注目し「歴史社会派の立場に立脚していた人」が「『乗合船』の仲間にどうして入り込んできたのであろうか。このプロセスは私の今後の課題」と述べている。碩学も疑問を呈したままに終わった羽仁と『乗合船』との関係も、伊賀の地縁という観点を導入すれば解決出来るのではないだろうか。すなわち羽仁新五の所収短歌が「疎開地浅春抄」と題されたものであり、羽仁は伊賀に疎開していたのである。[15] 上述した久保文武の歌集『春の霜』には羽仁を回想した「人の世のいのちかなしみ書きつづる君の思ひ出もおほに忘れぬ」の歌が見られる。胸を患い死が隣り合わせであった久保だけに、早世した才子を惜しむ思いが一層強かったのであろう。久保が勤務していた上野図書館に中市弘が羽仁を連れてきたのが二人の出会いであった。[16]

伊賀人脈以外の人物についても述べておこう。

喜田聿衛は甲鳥書林が合流した養徳社の編集者で、吉井勇のもとにも出入りしているから、言わば中市・矢倉と同格で『乗合船』に乗るにふさわしい人物である。

岡田清は東京美術学校出身、後に京都大学の井島勉に学んだ美術教育者。戦後は児童美術教育の第一人者となり膨大な編著書がある。吉井勇とは深いつながりのある創元社からも、昭和三十年代を中心に十数冊の著書を刊行している。一方で若い頃から和歌に親しみ、[17] 昭和十七年に歌集『青銅』を日本歌人社から刊行している。岡田も『日本歌人』人脈かもしれな

い。

唯一確証がないのが石黒梢である。可能性のある人物としては、河井醉茗の『女性時代』の最末期に連続して愛国詩を投稿している同姓同名の石黒梢がいる。『女性時代』昭和十八年八月号に「戦ふ心」が掲載されたのを皮切りに、「針仕事」「我が子よ大空へ」「忠霊を讃ふ」「早場米」「交換船を待つ」「詩感」「南の第一線」と昭和十九年三月の終刊号まで欠かさず掲載されている。[18]『女性時代』の石黒梢と『乗合船』の石黒梢が同一人物という確証はないが、取りあえず可能性として提示しておきたい。

五　第壹輯の口絵はどこに消えたか

前二節で第壹輯と第弐輯の目次を列挙したが、第壹輯は、口絵が小林古径でカットが小杉放庵、弐輯は口絵もカットも小杉放庵と記されていた。紅野敏郎は、第弐輯の放庵の口絵について「三人の子供のあふれるようなエネルギーを示した図」と述べる一方で、第壹輯については「口絵の小林古径は手もとの雑誌のものには切り取られていた」としている。そこで日本近代文学館に寄贈された紅野旧蔵本を見たところ、明瞭な形での切り取りや落丁は確認出来なかった。ただ、第弐輯の放庵の口絵も本文料紙とは異なるものが綴じ込まれ、頁数も打たれていないから、巧みに切り取られれば痕跡は残らないかもしれない。そこで可能な限り、現存する第壹輯を調査してみた。本節はその報告である。

現存する『乗合船』の中で最も重視すべきものは、この雑誌の呼びかけ人である吉井勇の旧蔵本である。京都府立京都学・歴彩館の吉井勇コレクションの中に当該資料は大切に保存されているが、注目すべきはその限定番号である。それは一番本ではなく五番本であった。呼びかけ人でありながらなぜ五番本なのか。この数字は、同人名簿中の吉井の序列（年齢順）に一致する。とすれば、長幼の序を重視し、同人名簿の順番に一番から八番までが、同人に配られたのではないだろうか。吉井勇らしい配慮と言えようか。だとすれば、準同人たちにも比較的早い番号のものが配られたのではなかろうか。紅野敏郎の旧蔵本は十六番本であるから、準同人格の旧蔵本の貴重資料となる。ところで五番本である吉井勇旧蔵本にも小林

古径の口絵は存在しなかった。

天理図書館には、『乗合船』第壹輯が二冊所蔵されている。五十二番、五十三番の連番で、天理図書館の受入印は昭和五十年十月であるが、同時に昭和四十七年七月六日に「真柱室より」寄贈されたとの印もある。番号から考えて、これは同人としての中山正善に配布されたものではなく、配布本とは別に二冊を受け取ったものであろう。この二冊には何らかの対価が支払われ、財政援助の一つであった可能性もある。中山正善（同人名簿の七番目）自身の手許にあったはずの七番本については、現在公開されている天理図書館の蔵書目録やデータベースには確認出来ない。猶、五十二、五十三番本にも古径の口絵は付いていない。

準同人格の旧蔵本としては次の二冊が知られる。神奈川近代文学館所蔵本は、第壹輯に「利玄の歌へる曼珠沙華」を寄稿した武者小路実篤旧蔵本。限定番号は十四番。岩手県立図書館本は、第弐輯に「啄木と私」を寄稿したあらえびす野村胡堂旧蔵本。限定番号が百九十番とやや後であるのは、第弐輯執筆のために見本として贈られたものでもあろうか。「啄木と私」については、紅野が縷述している。実篤・胡堂の手許にあった本にも、古径の口絵は残っていない。

旧蔵者は不明ながら、早稲田大学図書館所蔵本は、湯川秀樹の和歌の末尾に鉛筆書きで「この若き碩学にかゝる歌あり驚嘆すること久し」と記している。旧蔵者の感想であろうが、湯川の未紹介短歌を発掘した細川光洋の出身大学の蔵書であることに不思議な縁を覚える。この八十六番にもやはり口絵は残されていない。

その他に確認出来たのは、百二十番本と、二百四十七番本。後者は詩人の稗田菫平旧蔵本。稗田は、翁久允と同じ富山県の出身で、翁を顕彰した『筆魂・翁久允の生涯』（桂書房、平成六年）がある。翁久允と吉井勇との関係は別項で述べたところである。[19] また稗田菫平は第四節で述べた伊賀の同人誌『山望』を、同人の一人金子千鶴から献呈されているから（表紙に「金子千鶴氏より呈さる」とペン書き、稗田の印がある）、間接的ながら、吉井勇と様々な形で繋がるのである。猶、金子千鶴は「戦争末期菊山當年男を介して」「前川佐美雄」の「門を叩いていた」[20] 人物でもある。様々に交錯する人間関係が見て取れよう。百二十番本、二百四十七番本にも口絵は存在しない。

かくして、調査し得た九冊の『乗合船』第壹輯のすべてに小林古径の口絵は付いていないのである。こうした作業はさらに継続する必要があろうが、現時点では、古径の口絵は切り取られたり脱落したのではなく、発行時からなかったと断ずべきであろう。印刷や用紙の都合が付かなかったのか、口絵を付ける華美な造本に抵抗があったのか、様々な可能性が推測されるが、目次や「編輯清記」に古径の口絵についての記述が残されたままであることが、のっぴきならぬ事情であったことを示しているのではなかろうか。

六　乗合船を継ぐもの

『乗合船』は第弐輯で休止したが、その後継誌が存在する。昭和二十二年八月に甲文社から第一号が刊行された『手帖』である。判型は小B6判横本、随筆が中心で、定価二十五円で市販された。外形・内容・流通形態、すべてが『乗合船』とは異なっているが、「あとがき」に「『手帖』は第一流の随筆をあつめる考へである（中略）。『手帖』は以前の『乗合船』を改題して新出発したものである」と自称する。第一号は、桑原武夫「洞察について」、湯川秀樹「あざみと馬」、釈迢空「もの忘れ」、柳田國男「旅行史話」、梅原末治「ロッヂ氏の事ども」、大山定一「リルケ試論」、草野心平「るるる葬送」、吉川幸次郎「李元賓墓銘釈」、三宅周太郎「芸天国」という内容で、『乗合船』同人は湯川秀樹一人が執筆している。第二号（二十三年一月刊）に至り、ようやく吉井勇「赤楽筒茶碗」、小杉放庵「酒の歌」などの詠歌が見られるが、他は中谷宇吉郎「読書随想」、鈴木成高「祖父」、貝塚茂樹「英雄の誕生」、生島遼一「海と雪」、山本沖子「療養所」、大山定一「ハイネ」、三宅周太郎「芝居の苦学生」で、甲鳥書林人脈・甲文社人脈の人が多いが『乗合船』との関係はあまり強くない。五号まで刊行された『手帖』だが、吉井の寄稿もこの号のみで、それほど親しみは感じていなかったようである。そういえば、『手帖』第一号に寄稿した湯川秀樹が、第二節で引用した「乗合船」という文章で「その後『乗合船』がどうなったかはしらない」と述べていることも気になる。四半世紀後に書かれた文章だから記憶違いの可能性はなしとしないが、『手帖』に対する湯川のスタンスが感じられて面白い。

『手帖』誌も、入手しづらい資料であるので簡単に紹介しておきたい。

一号、二号は同一装丁の色違いで、一号は黒字に白抜きの書名で背文字は朱色、二号は朱色地に白抜きの書名で背文字が黒と、二冊並べると見事な対照を見せる。この頃『人間失格』を装丁している庫田叉の手になるものである。三号からは造本ががらりと変わり、同じ小B六判の判型ながら、通常の縦長の本となり、表紙にはレンブラントの素描が用いられている。四、五号も素描は差し替えられるが同一の装丁である。

三号以下の内容は以下の通り。三号は中谷宇吉郎「『團栗』のことなど」、鈴木成高「新円階級」、佐々木惣一「思い出す国際学争」、泉井久之助「うましか」、伊藤静雄「明るいランプ」、水原秋桜子「個展の季節」、クライスト・大山定一訳「ロカルノの乞食老婆」、三宅周太郎「百万人の心・十人の心」、四号は鈴木成高「敗戦の政治家」、恒藤恭「庭園と庭園美」、梶原三郎「人口について」、ベッティーネ・谷本幸訳「アルニムの手紙」、太宰施門「比較文学の歴史」、ハイネ・大山定一訳「ヘルゴランドからの手紙」、小野十三郎「芋と炭がはこばれる」、中勘助「随筆」、三宅周太郎「愛着の幸・瞑想の楽しみ」、五号は青山秀夫「合法性と倫理性」、西谷啓治「芸術と宗教」、泉井久之助訳「セネカ　閑暇について」、高安國世訳「ヘルダァリーンの手紙」、小牧健夫訳「放浪のヘルダーリーン」、冨士正晴「君山先生」、三宅周太郎「劇団黄金時代」。

『山望』創刊号巻頭に寄稿した大山定一が、一号から四号まで文章を寄せているのが目を引く。全号に執筆しているのは三宅周太郎一人で、三宅はこの頃甲文社から『演劇手帖』『続演劇手帖』も刊行している。『手帖』誌は、昭和二十四年六月の第五号を最後に発行を停止する。『乗合船』が静かに去り、その船の残した波が徐々に静かに消えていったさまにもたとえられようか。

おわりに

以上『乗合船』について、その後継誌『手帖』も含めて考察してみた。その結果、『乗合船』は吉井勇の発案による雑誌であること、誌名の命名者は新村出だが「静好」という初案から変更されたものであること、同人やそれに準じる人々は皆

吉井の知友たちであるが、それは甲鳥書林人脈とも言うことができること、第弐輯に投稿している人々は中市弘・矢倉年の伊賀人脈に連なる人が多いこと、第壹輯の小林古径の口絵は刊行時から附載されていなかった可能性が強いこと、などを明らかにすることができた。

残された課題は、中市弘・矢倉年と、甲鳥書林・養徳社・甲文社などをめぐる動きを明らかにすることであるが、これについては紙幅の制限もあり、別稿を期したい。

注

(1) 国会図書館には所蔵なし。公立図書館の横断検索である国立国会図書館サーチでは岩手県立図書館のみ、大学・研究機関の横断検索であるCiNii Booksでは天理図書館のみ。もちろん横断検索はすべてを網羅したものではなく、後述するごとくそれらを補う資料は現存するが、一応の目安にはなろう。

(2) 田坂「書物を紡ぐ人々 ―吉井勇『流離抄』を中心に―」(『文学・語学』二一七号、平成二十八年十二月)

(3) 「詩経国風・鄭風」の「女曰雞鳴」の「女曰雞鳴、士曰昧旦、子興視夜、明星有爛、将駆将翔、弋鳧與鴈、弋言加之、與子宜之、宜言飲酒、與子偕老、琴瑟在御、莫不静好」を出典とする。新村には「偕に夜を書に更かして朝いせし妹は告げずも雞鳴くとだに」の「女曰雞鳴」による短歌もある(歌集『雨月』、全集第十五巻によった)。

(4) 『西行物語』「遠江国天中の渡りといふ所にて、武士の乗りたりける船に、便船をしたりけるほどに、人多く乗りて船あやふかりけむ、「あの法師、下りよ下りよ」といひけれども、「渡りの習ひ」と思ひて、聞き入れぬさまにてありけるに、情なく鞭を以て西行を打ちけり」(講談社学術文庫『西行物語全訳注』桑原博史、昭和五十六年、の本文によった)。

(5) 石塚友二『日遣番匠』「『方寸虚実』のこと」学文社、昭和四十八年。

(6) 『山望』は昭和五十一年刊、甲鳥書林の最終期の本、昭和三十五年から四十五年までの中市の歌を収録。猶、前川佐美雄は甲鳥書林から歌集『大和』(昭和歌人叢書・第六、昭和十五年)、天理時報社から歌集『天平雲』(昭和十七年)、養徳社から『一千歌

集』（昭和二十二年）、などを刊行している。

(6) 他に『歌集　坊やの夢』（紫朗塔社、昭和九年）『新民謡集2　黄昏の雪柳』（林吉之助刊、昭和十四年）がある。国会図書館デジタルアーカイブで調査、原本未見。

(7) 吉井勇の書簡の中に、矢倉年の短歌に添削をしたものが残っている。

(8) 吉野孝雄『文学報国会の時代』第六章「戦時下の作家たち」（河出書房、平成二十年）など、この事件に言及するものは多い。

(9) この頃の事情については、田坂「吉井勇と川田順　―昭和二十年前後の書簡を中心に―」（同志社大学『社会科学』四六巻四号、平成二十九年二月）で言及した。

(10) 戦後中原淳一のヒマワリ社から再刊されるとさらに人気を博し、今日では松田智雄監修・上笙一郎編で『松田瓊子全集』全六巻（大空社、平成十九年）が刊行されている。

(11) 近藤健史「野村胡堂と矢倉年―胡堂の書簡が語るもの」（『日本大学通信教育部研究紀要』二二号、平成二十一年）、「野村胡堂の終戦のあと―矢倉年への書簡より」（『日本大学通信教育部研究紀要』二六号、平成二十五年）。

(12) 吉井勇の『流離抄』には「伊賀焼の當年男の窯の」「芭蕉窯主人の焼ける」「友の書きし芭蕉の伝を」「當年男の竈の徳利恋しも」などと詠まれている。

(13) 鷺書房については岡自身の回想録『七十年のあしあと　本とあゆんだ私の小径』（私家版、昭和五十七年）が有益。

(14) 「観阿弥出生に関する一考察」（『国語国文』昭和三十二年十一月号）、「楠木正成と観阿弥」（『日本史研究』三八号、昭和三十三年九月）ほか。

(15) 羽仁新悟の生涯については、玉井敬之「ある近代文学研究者の軌跡　―羽仁新五の仕事について―」（『同志社国文学』一九号、昭和五十六年十月）が至便。

(16) 久保文武「羽仁新五さんの思い出」（『伊賀百筆』四号、初出は『市民』ゼロの会、昭和三十三年八月）、いま『伊賀百筆』誌転載のものに依った。同号は羽仁新五の五十回忌の特集で、羽仁が伊賀の人々に与えた影響の大きさを知ることが出来る。

(17) 富田民治は、岡田が「学生時代に短歌部で和歌や作詩なども楽しんでいた」（「岡田さんの思い出」『美術教育　岡田清氏追悼号』二一四号、昭和五十年）と述べ、前川佐美雄は「美術学校時代の旧師平田松堂画伯」の縁で『日本歌人』に参加したと、『青銅』の序文で記している。『青銅』はその平田松堂や金原省吾・倉田三郎らの装画をまとった美しい本である。

(18) 「戦ふ心」の詩評で醉茗は「此人は前号にも一篇あり」と記しており、十八年七月号に本多梢名義で掲載された「山本元帥の英

霊を拝す」がそれにあたるのであろう。詩の傾向は一致するから、これを含めれば、九か月連続掲載になる。本多は石黒の旧姓であろうか。

(19) 田坂注(2)論文。

(20) 金子千鶴『歌集　飛天のごとし』「あとがき」(日本歌人発行所、昭和五十四年)、金子没後の刊行。

(附記)

貴重資料の閲覧をお許し頂いた日本近代文学館、神奈川近代文学館、岩手県立図書館、早稲田大学図書館、天理図書館に深謝申し上げる。とりわけ貴重な吉井勇宛書簡の閲覧に御高配を賜った、京都府立京都学・歴彩館(平成二十八年十二月より組織名変更、調査当時は京都府立総合資料館)、担当の土橋誠氏に厚く御礼申し上げます。